

高山先生の都市計画

東京大学名誉教授

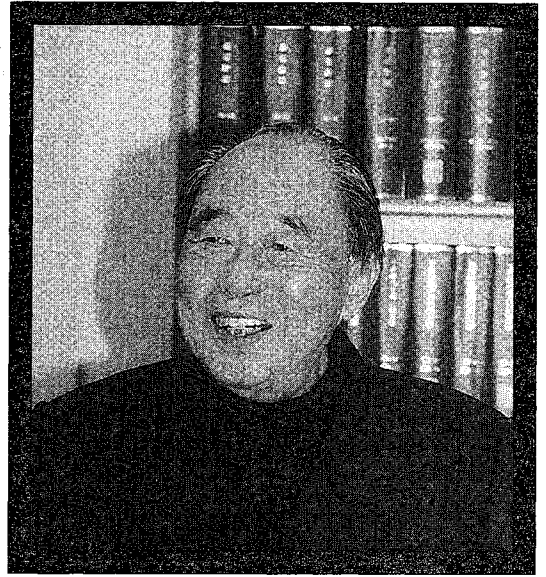
慶應義塾大学教授

伊藤 滋

平成11年7月23日の夜、高山英華先生は肺塞栓症で亡くなられた。89歳であった。先生は常々21世紀を見たいと云っておられた。あと2年元気であったら、私達教え子は先生から20世紀を顧み21世紀に望む話を聞いたのにとすると残念でならない。

先生は昭和9年に東京帝国大学の建築学科を卒業されている。それから亡くなられる迄の65年間の人生は都市計画の社会的地位の確立と、市民社会への普及に費やされた。都市計画は市民生活の向上にとって極めて重要な技術であり、その視点を何時も忘れてはならないと考えられていた。もちろん先生は都市計画の学問上の中心的な存在として、社会の檯舞台で存分に活躍された。幾つものニュータウン計画、オリンピックや万博という国家的行事の施設分野で大きな指導力を発揮された。しかし先生の学問と行動の原点は、都市の庶民生活の中にあった。先生は新宿が好きであった。また中央線沿線の駅前商店街の小さな飲屋が好きであった。何故ならば、そこで普通の人々の市井の話を聞くことができたからであった。気心の知れた近所の人達と安い温泉旅行にも行かれた。大衆旅館の大広間の宴会で商店街や農家のおじさん・おばさんの苦労話が聞けたからである。労働組合の若いリーダー達と行きつけの居酒屋でよく論争をされていた。つまり先生は“人”を愛していたと思う。“人”の存在しない都市空間は意味がないからである。調査のための調査、技術のための計算式は意味がないと私達教え子はよく諭された。“都市計画研究はまず現場を観察し人々と会話を重ねれば研究の成果は見えてくる。それを調査や計算式で確かめるのである”と先生は考えられていた。

その点で先生は調査分析よりも創造と提案を重視されていた学者であると思う。何故ならば先生



故 高山英華 氏

本会の名誉会員高山英華氏には平成11年7月23日永眠されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

社団法人 日本都市計画学会

本来の性格は感受性が強いロマンティストであり、体制を警戒するリベラリストであったと私は確信しているからである。

晩年、先生は弟子達にこう云われていた。“自分は信念を変えずに真っ直ぐ人生を歩いてきた。だが世の中が自分のまわりを右へ行ったり左へ行ったりよろめくから、時に左に見られたり、右に見られたりするのだ。”これは至言である。リベラリストとはこのような人を云うのであろう。

先生のロマンティズムは単に世の中を批判したりできない夢を売ることではなかった。極めて現実的な都市空間造りについてロマンティズムがあったということである。先生の類稀な組織力、人に愛される信頼性と包容力によって、都市計画の大きいプロジェクトであれ、小さいものであれ、そこに参加する人達が共有できる現実的な将来像を先生は提示された。その意味でロマンティストであった。東京オリンピックの駒沢運動公園、高蔵寺ニュータウン、霞ヶ関ビル再開発、沖縄海洋

博の敷地計画等に先生の創造者としてのロマンティズムをうかがうことができる。

亡くられる数年前から先生は、東京の既存市街地の零細なビルやマンションが密集している状況を深く気にされていた。地震の際の危険性を感じとられていたのであろう。時折り高層ビルの窓からその市街地を眺められて、“都市計画の仕事はあそこに無限にある。大都市のリノベーションの始まりだ。”と話されていた。先生のこの言葉は私達都市計画家にとって大きな励ましである。21世紀、先生の遺志を心に刻みながら、市民を支える都市計画を展開させてゆきたい。ここにあらためて先生の御冥福をお祈りする。

高山英華先生の足跡

東京大学教授 大西 隆

本学会名誉会員 高山英華先生は、1999年7月23日、89歳で永眠されました。先生は、51年に本学会設立に参画され、以来73年まで理事を務められました。その間の多大な研究上のご功績と、長年のご指導・尽力により80年に名誉会員となられました。

先生は、1910年東京・高輪に生まれ、成蹊高校を経て、34年に東京帝国大学建築学科をご卒業になりました。直ちに同学科助手に任ぜられ、その後入隊を経て、38年に助教授、再び応召後、49年に教授に就任、同年「都市計画における密度に関する研究」によって、工学博士を授与されました。その後、62年に、先生が中心となって、東京大学工学部に新たに都市工学科を創立し、教授に就任されました。70年に東京大学を退官、名誉教授となられ、その後、都市計画中央審議会会長、日本地域開発センター理事長、工学院大学理事長をはじめとする要職を務められました。

先生のご業績は、わが国において都市計画の学問を興し、かつそれを深く実践と結びつけたことにあります。

都市計画の学問においては、高度成長期にあって、都市化現象が著しく、都市問題への取り組みが焦眉の急であった時期に、東大に都市工学科を設立し、この分野における教育と研究を飛躍的に

発展させる契機を創ったことを特筆するべきでしょう。同時に、先生ご自身も、都市の密度論をテーマに研究を進められ、学会機関誌第1号に掲載された「都市計画の方法について」など都市計画研究の方向を示唆する論文を発表されました。また、地震国として都市防災の研究を都市計画の重要な領域として位置づけられました。

都市計画の実践においては、高蔵寺ニュータウン計画、東京オリンピック施設計画、八郎潟干拓地新農村建設計画、筑波研究学園都市開発基本計画、沖縄海洋博覧会会場計画など60年代、70年代の重要な都市計画や、集合的施設建築計画の策定に携わり、指導的な役割を果たされました。また都市防災においては、東京都の江東防災拠点計画を手がけられました。これらの実践に関わるご業績及び実践と学問を結びつけて計画学を体系化したご業績に対して、都市計画学会石川賞、建築学会特別賞、同大賞が授与されました。

学問と実践を統合するために、学際的な研究や都市計画プランナーの活動舞台の創設にも力を注がれ、広く社会科学分野と自然科学分野の研究者の実践的共同研究を目指した日本地域開発センターの設立、さらに都市防災研究所、再開発コーディネーター協会、森記念財団など今日の都市計画の実践的研究やプランナーの活動にとって重要な位置を占める諸組織の設立に尽力され、設立後も要職にあって指導されました。

このような大きな足跡を残されながら、先生は、一研究者として、あるいはむしろ一市井人として都市を考える立場をくずされませんでした。先生が勲位や肩書きを貴しとせず、最晩年に至るまで、都市を語ることによって、訪れる人々に都市計画にかける情熱と深い学識を示されたことは、多くの人々にとって忘れがたい思い出であり、畏敬の念を禁じ得ないところです。

ここに、わが国都市計画研究のパイオニアとしてのご活動に改めて感謝申し上げ、ご冥福をお祈りします。